

## 随想

## 企業に触れて思うこと

名誉教授 小森 悟



専門を生かしたコンサルタント業や丹波の実家での農業への挑戦等の定年退職後の計画は未だ実現できていないが、非常勤職を渡り歩きながら老害を及ぼさない程度に研究教育に携わる毎日を楽しんでいる。一つは、同志社大学に嘱託講師・研究員としてお世話になり講義と研究活動の場を与えてもらいながら、同大の懐の深さ、親切な教職員、驕りの無い優秀な大学院生等に目を引かれている。また、海洋研究開発機構では招聘上席研究員として若い研究者の皆さんと環境流体に関する研究等でリフレッシュさせてもらうとともに煩雑な研究活動評価や研究費・人員削減等の研究所が抱える問題も感じ取っている。このような教育研究活動の他にも、現役時代には基礎研究重視で産学連携には消極的であったが、定年後は企業の社外取締役や技術顧問として企業経営や技術開発等にも携わっている。特に、企業経営や組織変更の在り方、先端技術よりも基盤技術による技術開発の重要性等を自分の目で見る事ができるのはこれまでとは違う別世界ゆえに非常に新鮮に感じるとともに、つい大学と比べてしまう。

企業の主目標は利潤追求と明確であるが、この目標の達成状況が悪い場合には、不採算事業の廃止や組織のスクラップ&ビルド等を経営陣が迅速に行い軌道修正がなされる。翻って、企業の利潤追求に相当する大学の主目標はと考えると、研究大学に限れば金銭的利潤追求ではなく、研究力の向上と研究を通じた有能な人材育成にあると思われる。しかしながら、昨今の報道等によれば日本の大学の研究力の低下が指摘され、この主原因として大学への供給資金の減少が挙げられている。確かに運営費交付金の減少は深刻な問題であるが競争的資金の積極的な獲得により総研究費が増えている大学でも研究力の低下が懸念されている。これは、企業に例えれば、受注は多いが（大学の場合：大きなプロジェクトで資金を稼ぐが）、収益が増えない（研究力が上がらない）、つまり、儲からない仕事（国際的論文の発表に結びつかない活動）をやっていることになる。本来なら過去数年程度の研究成果だけを評価して運営交付金や競争的資金が配分されればいいものを、官僚・有識者好みの組織・制度改革等を条件とした即戦型の大型プロジェクトが次々と立ち上がるため、面子をかけた資金獲得競争に中堅の優秀な研究者が多大な時間的犠牲を払うことになる。その資金の獲得後も組織弄りや、年度毎の資金の分配消費、上辺の繕いのための催し物開催や成果報告作成等の無駄な仕事に時間を奪われ堅実な論文作成のための研究どころではなくなる。

研究費の問題以外にも常勤教員の定員削減も進行する中で、増大する産学連携、地域貢献、高大連携、教育・入試改革等の仕事にも対処せねばならず、研究よりもそれらの仕事に生甲斐を感じる土日完全休暇型の教員が過度に増殖するようであれば、大学の目標も益々薄れるのではと懸念される。企業の場合、「損して得取れ」の戦略もあるが、大学の場合、無駄な仕事で一度低下した研究力を取り戻すのは容易ではない。中期目標等は研究業績の向上に重点を置いた簡単なものにし、研究資金配分は研究業績の評価で行い、大学自らも研究能力不足の教員や不要な組織・制度の整理等を促進すれば、研究力向上のための毒のない真の大学改革に繋がりに思うのだが。。。

（こもり さとる、平成 28 年退職 元大学院工学研究科教授 専門は流体工学）

[目次に戻る](#)